

●シリーズ「アトピー性皮膚炎が今、熱い」—第8回—

「皮膚常在菌」と皮膚バリア機能

亀田総合病院皮膚科

池 田 大 志

名作映画や人気ドラマには、必ずといってよいほど「名脇役」なる俳優が活躍しております。「名脇役」がいてこそ主役が際立ち、その作品が人に感動を与えるのではないのでしょうか。

私が思うに、皮膚バリア機能においても「名脇役」が存在します。それは「皮膚常在菌」という微生物です。人体の皮膚表面には、表皮ブドウ球菌、アクネ菌、マラセチア菌など、約10種類ほどの菌が文字通り「常在」しております。これらすべての菌に共通しているのは「人体に有害な病原菌の繁殖を防ぐ」という役割をもつことです。

代表的な常在菌である表皮ブドウ球菌は、皮脂や汗を栄養素として適度に繁殖しながら皮脂を弱酸性に保ち、外部からの病原菌を侵入させない、あるいは増殖させないという働きをしています。

皮膚科の日常診療において、伝染性軟属腫（みずいぼ）や伝染性膿痂疹（とびひ）は非常に診療する頻度の高い疾患ですが、これらの疾患にみられる共通点として、皮膚バリア機能が低下している部位に生じやすい、ということが挙げられます。つまり、病原菌が感染している部位には、下地に乾燥肌や湿疹が存在しているということです。皮膚バリア機能が低下した部位では皮脂の産生が適切でなく、常在菌がうまく機能しないために、ポックスウイルスが侵入して伝染性軟属腫が発症

したり、黄色ブドウ球菌が増殖して伝染性膿痂疹を発症しているものと思われます。

前回までにお伝えしたように、頻回な入浴や石鹸の使用は、皮膚バリア機能を低下させ、アトピー性皮膚炎発症を引き起こすリスクを高くします。同様に、皮膚バリア機能を低下させる行為は皮膚常在菌の正常な発育を阻み、病原菌への抵抗力を失う結果、さまざまな皮膚感染症を引き起こすことにつながります。

皮膚疾患を診療する機会の多い皮膚科医や小児科医にとって、今もっとも求められていることは「皮膚バリア機能をよい状態に保つスキンケア」を確立させることであると私は考えます。そのために重要なキーワードを2つ挙げるとすれば「洗いすぎないこと」と「皮膚常在菌を守ること」であると思います。この2つのキーワードを追求したスキンケアが確立されれば、アトピー性皮膚炎だけでなく、さまざまな皮膚疾患を発症することなく、快適な生活を過ごせることにつながると、私は信じています。特に、アトピー性皮膚炎を未然に防ぐことができれば、アレルギーマーチとして気管支喘息やアレルギー性鼻炎・結膜炎などの発症も防ぐことができ、これらの診療に関わる医療費も抑制することができます。

現代は「抗菌」、「殺菌」、「消毒」などという言葉が身の回りで多く飛び交い、あらゆる

る菌を不潔とみなすような誤った認識が普及しているように思えます。また、「皮脂汚れ」という言葉が存在しているように、皮脂の役割を誤解し、石鹼を過度に使用する人が多い印象があります。決して皮脂や常在菌は「汚

れ」や「不潔」なものではなく、人体にとって極めて大切な役割をしているものであるということを、私はすべての人に伝えたいと思っております。